■ 特集
私たちのまちのすがた、「景観」について考える

まちのたたずまいを感じてみよう

私たちが何げなく見ているまちの風景。
そこには、目に映る自然や建物だけでなく、
ふとした瞬間に感じる印象やそれぞれの想い入れなども、
深く関わっているのではないでしょうか。
そこで今回の特集は、
まちを見つめることにスポットを当て、
「景観」について考えてみました。

◀秋山さんの作品のひとつ「歩行者通路予定地」は、大宮ソニックシティオープン前年の、昭和62年のまちの様子を描いたもの。「普段どれほどの風景を見過ごしているのか、絵を描いているとわかります」。切り取られた「今しかない風景」に想いを込めて、これからもまちを見つめます。

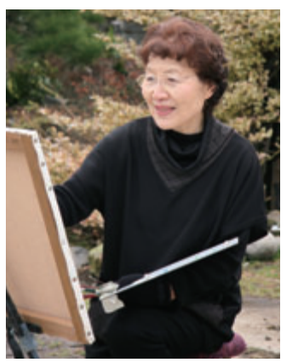
「景観とは、ぬくもりがあって人の心を引きよせるもの。まちももっとおしゃれを楽しんでほしいです」

まちの中でイーゼル（画架）を立て、市内の風景を30年間描き続けている画家の秋山静子さん。キャンバスに広がるのは、時の流れとともに、やがて姿を変えてゆくまちなみです。

「目の前にあるこの景色、この色は、今この瞬間しか描けません。こうした景観を、私は描き残したいんです」と秋山さん。まちを描き続けるうちに、自然や建物だけでなく、歩く人の姿や様子も変わっていくことに気づきました。「移り変わりを自分の目で見つめて描いてきたことで、人とのつながりも生まれ、私は人生を何倍も楽しんでいるなあ」と感じるそうです。

秋山さんが本格的にまちの絵を描き始めたのは昭和58年。生まれ育った大宮駅周辺が、新幹線の開通とともに劇的に変化する様子を見て、「まちの変化を描き残してみよう」と思ったのがきっかけです。ある個展で大宮駅前や操車場などの絵を展示したところ、お客様から思いがけなく大絶賛を博しました。「見慣れたまちの風景だったからこそ、『私たちが住むまちなみも絵になるんだ』という共感を呼んだのでしょうね。私もうれしかったです」と振り返ります。

秋山さんにとっての景観とは、「ぬくもりがあって、人の心を引きよせるもの」。個性的でありながらまちに調和し、景観を大事にするという「思いやり」をもつことが、活き活きとしたまちなみに結びつくと感じています。「お店のディスプレイなども、大切な景観の要素。私たちがおしゃれを楽しむように、まち全体ももっとおしゃれをしてほしいですね」と話します。



秋山静子 氏
（あきやま・しずこ）

■プロフィール
1940年埼玉県旧大宮市生まれ。旧大宮市立桜木小学校、桜木中学校、県立高校卒業。武蔵野美術学校を経て、1964年太平洋美術学校卒業。
著書には「ふるさとを描く大宮」などがあり、大宮市文化賞をはじめ数々の賞を受賞。